

A112

アウトビアンキA-112は、サイドカムシャフトの直列四気筒をチューンした機関を積んでいる。

排気量903立方センチ、最高出力44馬力。

時速0から100キロまで13.7秒。

そこから察するに、この機関はメーカー公称より力があるのだろう。たぶん47馬力。

四段の手動変速機で時速140キロ近くまで押し上げるが、100を超えると途方もなく食う。しかもスーパーは一リットル1,510リラだ。

そこでアルドは、明日は早起きして国道に戻ろうと決めた。

いまは十九時、われわれは公園のベンチに腰かけている。私はヴェネツィア・ビエンナーレの全ブースを見終えたところだ。

今朝十時からアルドはここで私を待っていた。新聞を一面から最終面まで読み、燃料に大金を使わずにすむ方法を見つけたらしく、たいそう満足そうな顔をしている。

途方もない燃費だけがA112の問題ではない。四十七馬力の生む振動は、助手席の人間を眠らせ、運転者の腕をしびれさせる。

だから国道の道中、われわれは百キロごとに停まる。コーヒーを一杯、フィルターなしのジタンを一本、そして地元紙をざっと一読するために。

選ぶのは、貴族めいた構えでいて安い店だ。

どの店にも灰皿の置かれたテラスがあり、方言があり、歴史がある。

アルドはその土地について知っていることを、私にぜんぶ話してくれる。

歴史があるということが、この不条理な名前をもつ村々の果てしない連なりの存在を、いくらか受け入れやすくしてくれる気がする。

カ・サッピオーニ、フィエツソ、セルヴァッツァーノ・デントロ、オッペアーノ、トレヴェンツォーロ、ゴイト、アックアネグラ、ピッツィゲットーネ……

互いに縁組みした貴族の家々が、嫉妬と戦争を生んだこと。落雷に打たれたという聖母たちの出現。ドイツ兵に侵され、ガリバルディの兵に奪い返され、パルチザンに占拠された土地。

巨大な工場を抱えた村、ナポレオン戦争の舞台となった村、商人や密売人や逃亡者やイストリアからの亡命者たちの拠点となった村。

アルドは、われわれを取り巻くものがなぜ存在するのかを語りつづける。私のほうは、奇妙な三角形をした小さな三角窓ごしに、自分のまわりに組み上がっていく世界を眺めている。頭のなかですべてが混ざり合い、私は四十七馬力に揺られるにまかせる。夢のなかを、駆け足で。

これから先、私は人生の高速道路をいつも避けるだろう。

ありがとう、アルド。

